

新聞史料による土木遺構の発掘記事と その現状に関する研究*

A Study on the Ruins Relating to Civil Engineering
and these Present State Based on News Database

安保堅史** 藤田龍之*** 知野泰明****

by Kenji ANBO, Tatsushi FUJITA and Yasuaki CHINO

要旨

ここ数年、発掘される遺構とその報告は、公共工事や宅地開発などの建設工事の増加傾向に比例するかたちで増え続けている。また、それら遺構の内容には土木に関係しているものも数多い。本研究では発掘土木遺構に関する近年の発掘記事と関連記事をもとに、どのような種類の遺構が発掘されているのか、また、保存あるいは何らかの形で活用されている遺構にはどのようなものがあるのかを知るために、具体例を示した上で保存・活用されている遺構の傾向を分析し、そして遺構に関する世論の関心や重要度の変遷を追うため講演やシンポジウム、フォーラムなど記事数の数値的变化を検討した。その結果、時代が新しくなるにつれ、できる限り遺構を残していこうという動きは大きくなってきてはいるものの、実際に保存・活用されているのはごく一部で、その内容も偏っているということが判明した。その内容から土木遺構の今後の活用のあり方や問題点を検討してみた。

1. はじめに

本研究は昨年の土木学会年次講演会発表論文「新聞にみる発掘された土木遺構に関する研究」の延長にあたるものである。前回の研究では朝日新聞の記事をもとにして発掘土木遺構の地理的および時代的分布傾向を検討してみた。また、新聞をデータとして扱う場合の利点や注意点についても考察してみた。その結果、ある分類遺構がどの地域に多く発掘されているのかという事が分かり易くなり、また様々な遺構の比較情報（最古、最大など）が含まれている記事が多いため、短期間に各分類の発掘遺構全てを検討、データを処理したい場合に向いているということが分かった。それらを踏まえた上で、今回はさらに検討する新聞のデータを全国の新聞記事へと広げ、検討内容として発掘土木遺構や関係する記事の変遷についての項目を加えることによって、発掘遺構に対する世論の関心や重要度がどう変化してきたかを把握し、現在における保存・活用に関する問題点を考察することを目的とした。

本研究では、「月刊文化財発掘出土情報」1) という、全国の新聞から遺構や遺物、遺跡の発掘記事や考古学的な発見、シンポジウム・講演などの関連記事をまとめた雑誌の1989年2月号～98年2月号までの掲載記事をもとに、以下の検討を試みた。
①発掘遺構の内容の検討 どのような遺構がどれくらいの割合で新たに発掘・あるいは継続調査の報告がされているのかを調

*keywords: 新聞史料, 発掘遺構, 考古

**学生員 日本大学大学院 工学研究科 土木工学専攻

(〒963-8706 福島県郡山市田村郡徳定字中河原1番地)

***正会員 工博 日本大学教授 工学部土木工学科

****正会員 博(学術) 日本大学専任講師 工学部土木工学科

べるため、期間内に発掘・あるいは調査された土木に関連する遺構をその使用目的・材質・工法等から分類し、表-1および図-1にまとめ、考察を行った。

②史跡整備の内容 保存活用状況の把握のため、土木に関する発掘遺構で史跡整備がなされたか、あるいはその予定である遺構・遺跡を表で示し、その内容について表-2にまとめ、考察を行った。

③講演・シンポジウム関係記事の変遷 遺構の保存・活用に対する世論の関心を見るため、調査期間内のシンポジウムや講演会などの記事中に土木遺構関連あるいは遺構の保存・活用関連記事がいつの時期にどれくらい含まれているかということを図-2で示し、考察を行った。

なお、本研究で扱う「土木遺構」は実用的であったと考えられているもののみを抽出し、祭祀目的とされているものは対象から除外した。

2. 発掘遺構の内容と年別の推移

(1) 分類項目の設定(表-1 発掘遺構分類表を参照)

本来ならば遺構1つ1つについて検証するべきだが、対象とする件数が約1500件と多く、また細分類も多岐にわたるため、本研究では大まかな分類項目の設定を試み、年間の発掘・調査件数を集計し、その傾向と代表的な例を示すにとどめた。

以下に分類項目の設定条件を示す。

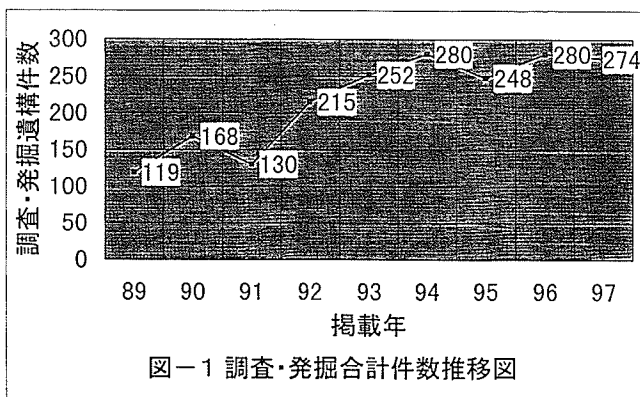
- ①「列石・配石」: 素材が石である構造物で、それを並べなどして構成される遺構。
- ②「石垣・石積み」: 素材が石である構造物で、城址や館跡などの基礎部分にあたる遺構。

- ③「堀・環濠」：材質に関わらず、集落や城址、館跡の周りを囲うように掘られた溝。
- ④「水田」：水田やあぜ道など。
- ⑤「用排水路」：灌漑のための用水路や、生活廃水、雨水を流したと考えられている水路遺構や、水洗トイレ的な下水道遺構など。
- ⑥「人工河川・運河」：比較的大規模な流路遺構。
- ⑦「水場・護岸」：水洗い場や、水さらし場、小規模な護岸施設など。
- ⑧「池」：池遺構。庭園遺構内に見つかるものや、農業用貯水池など。
- ⑨「井戸」：材質に関わらず使用目的が地下水の汲み上げであるもの。
- ⑩「木樋・竹樋」：木や竹で造られた樋管。
- ⑪「堰」：堰遺構。主目的は灌漑や上水などの取水である。
- ⑫「堤」：堤防遺構。
- ⑬「土塁・盛り土」：土を積み上げた構造物。建物や集落の防護のためのものなど。
- ⑭「土坑・トイレ」：地面に開けられた穴。その目的は多様である。トイレ遺構もこれに分類した。
- ⑮「橋」：川に架設される橋と、土橋など。
- ⑯「庭園」：庭園遺構。
- ⑰「道路」：集落遺構の一部として見つかる道路と、街道遺構など。

なお、ある遺構で堀と石垣と井戸が見つかった、というように条件にいくつか重なったものに関しては、当てはまる項目全てに含めて計数した。

表-1 発掘遺構分類表

掲載年	89	90	91	92	93	94	95	96	97	合計
遺構分類										
列石・配石	11	15	10	13	11	7	16	22	15	120
石垣・石組み	10	22	19	18	30	37	30	52	37	255
堀・環濠	31	60	24	42	56	72	66	67	56	474
水田	17	12	17	26	16	23	8	21	22	162
用排水路	7	8	18	16	24	16	24	14	19	150
人口河川・運河	0	1	0	3	1	3	2	2	6	18
水場・護岸	1	3	1	3	7	3	3	1	10	32
池	5	2	1	6	3	7	3	5	5	37
井戸	9	17	14	30	45	33	36	13	24	221
木樋・竹樋	0	2	1	3	5	4	5	5	6	31
堰	5	1	0	5	3	3	5	3	4	29
堤	1	0	3	1	4	3	3	6	5	26
土塁・盛り土	6	8	6	16	12	17	16	22	14	117
土坑・トイレ	3	4	2	9	6	9	3	10	8	54
橋	0	2	1	3	6	12	2	9	5	40
道路	8	8	11	15	18	24	17	25	26	152
庭園	5	3	2	4	5	5	9	3	12	48
合計	119	168	130	215	252	280	248	280	274	1960



(2) 発掘遺構件数の推移 (表-1 発掘遺構分類表を参照)
発掘遺構の各年の合計と、各分類項目遺構群ごとの年別推移と内容代表的遺構についてここでは述べたい。

表-1では横軸に発掘及び調査に関する記事が掲載された年、縦軸に遺構分類を配した。

まず合計件数の掲載年による推移に着目すると(図-1 発掘遺構合計件数推移図参照)、89年~91年まで横ばいであったものが、92年に200件を越え、94年、96年には最大280件という数まで増えている。

次に、分類ごとの件数の推移とその傾向、代表的な遺構とその内容について以下に示す。

①列石・配石：本研究での検討範囲内での合計件数120件は総遺構数1960件に占める割合約6%。発掘件数全体の推移とはあまり関係なく、毎年平均的に調査・発掘されている。代表的な遺構には縄文時代の遺構、環状列石があり、秋田の「伊勢堂岱」や「大湯環状列石」、青森の「小牧野」など、東北で多く発掘されている。

②石垣・石組み：合計件数では2番目に多く調査・発掘されている分類項目である。合計件数255件の総遺構数に対する割合は13%。城址や庭園遺構の再発掘など、学術調査がもともと行われていたことに加え、近年の史跡整備に伴う調査が増加していることがこの分類の件数を多くしている要因である。代表的な遺構に中世から近世にかけての城址で「岡山城」「安土城」などの石垣調査や、古墳時代では奈良の「両槻宮」などがある。

③堀・環濠：最も多く調査・発掘されている項目で、総遺構数の約24%を占めている。この項目は先史時代の環濠遺構や大溝とそれ以外の中世以降の城址・館跡の堀遺構に大別され、その他に町割りの役割を果たしたと考えられるものも出土している。材質的には素掘りや石造で、石垣・石組み分類と重複している遺構も多い。先史時代の遺構の代表的なものには大阪の「池上曽根」佐賀の「吉野ヶ里」長崎の「原の辻」などがあり、城址の堀遺構で代表的なものには「那古野城」と考えられている遺構で、戦国時代では最大級の幅13mのものや、町割りの堀としては時代不詳の遺構で兵庫の「桜町」などがある。

④水田：ほぼ全てが開発に伴う発掘調査で、毎年平均的に見つかる。灌漑遺構や畝、集落とともに見つかることも多い。中でも福岡の「板付」は弥生時代最古の水田遺構として有名である。

⑤用排水路：水田や道路遺構とほぼ同数の遺構が見つかる。その性格は様々で、現代の上下水路に近いものもあれば、堀と機能兼用していたと考えられている遺構も見つかる。代表的なものに奈良時代の奈良の「纏向」の石造遺構が、同時に発掘された遺構とのつながりや寄生虫検出で用排水機能を持ち最古の水洗トイレ的なものと判明したというものがある。

⑥人工河川・運河：数は少ないが、先史時代からの大規模な物が見つかる。人工河川として弥生時代の島根の「目久見」、用排水路遺構とは同じ遺跡内で、つながってはい

るが別の遺構である「纏向」大溝がともに6m幅というその規模の大きさで有名である。

- ⑦水場・護岸：この項目に分類された遺構は石造と木造構造物があるが、水場遺構としては新潟の「元屋敷」が唯一トチと思われる植物を敷き詰めためずらしい遺構が見つまっている。
- ⑧池：ほとんどが庭園遺構に関係するもので、庭園項目と重なっているものが多い。一部大規模集落内の灌漑用と考えられる遺構が見つまっている。園池遺構は奈良・平安時代～江戸までの遺構が見つまっている。代表的なものに最古の人工池として知られている大阪「狭山池」、園池としては近年復元が進んでいる奈良「平城宮東院」が有名である。
- ⑨井戸：件数は3番目に多く、全体の8%を占める割合で見つかつており、92年から95年頃特に多い。
素材は石造と木造がほぼ同数で、時代は縄文から江戸まで幅広い範囲で見つまっている。中には大木を丸ごとくりぬいたものや、城内の溜め池的性格を持った大井戸などが調査されている。直径2mという大きさであることや、年輪年代測定法を用いて計測され、正確な製作年（紀元前52年）が判明したことで大阪の「池上曾根」のヒノキ製井戸が有名である。
- ⑩木樋・竹樋：その多くは上水道や灌漑などに用いられていたと考えられ、材質は竹を使ったものが4件、それ以外はすべて木を使ったものであった。造られた年代は不祥であるが、竹樋の代表的なものに構造が現在の水道と近い山形の遺構「米沢城」、灌漑に関係する遺構で大阪「万福寺」の木樋はヤナギの中空構造で、堰構造物と組み合わせられているもので弥生時代としては高い技術のものとして評価されている。遺構木樋は長野や東京などで江戸時代の上水道に使われたものなどが見つまっている。
- ⑪堰：数は年平均約3件と少ないが、弥生時代や古墳時代の灌漑に関係するものから奈良・平安時代の庭園に関わるものなどが見つまっている。灌漑施設としては、三重の「片部」で見つかったものは古墳時代前期の遺構で、千数百本の木材を組み合わせて構成された10重以上の堰が配されるという頑強で大規模な造りのものであった。
- ⑫堤：河川改修に伴って多く見つかる遺構で、岡山で見つかった古墳時代の大規模な堤防遺構「津寺」、古墳時代から奈良・平安時代頃までの遺構と確認された佐賀の「堤土塁跡」の版築技法を用いた遺構、天竜川で見つかった江戸時代の堤防遺構で「割り石川除け」工法の遺構、などがある。
- ⑬土塁・盛り土：防衛目的や建物の基礎的性格を持つと考えられている遺構が多く見つまっている。規模も様々だが、大規模なもので、代表的なものは縄文時代青森の「三内丸山」、栃木の「寺野東」の土塁などがある。
- ⑭土坑・トイレ：大規模集落の一部として見つかることが多いようである。貝塚やごみ捨て場、氷室など用途は様々。またトイレ遺構は近年それを専門にした研究発表会が行われるなど、研究が盛んになっている分野のようである。トイレ遺構では「鴻臚館」などはその土壌分析で平安時代

の食生活や、男女のトイレが別れていたことなどが判明し、話題になった。

- ⑮橋：庭園内の小規模なものから、安土桃山時代の木橋の基礎部分、橋の架け替えに伴い発掘された石橋などが見つまっている。戦国時代の遺構には「難波氏居館跡」、架け替えや調査でで見つかったものに沖縄で江戸時代ごろの遺構とされる「報徳橋」の石橋がある。
- ⑯庭園：合計件数は少ないが、列石・配石遺構のように毎年平均して調査が行われている項目である。最も古い遺構に「城之越」遺構があり、これは古墳時代のもので、日本庭園のルーツとされるものである。
- ⑰道路：総計の推移にはほぼ添った形で増えているのがわかる。この分類は街道遺構と大規模都市遺構の区画道路に分けられるが、街道の遺構として最も古いのではないかとされている「鴉神」、区画道路として「藤原京」「長岡京」など奈良・平安期の遺構が調査されている。

3. 史跡整備の内容（表-2 史跡整備の現況 参照）

新聞記事では、ある遺構が発掘された場合、その遺構の内容やその価値などは詳細に記述されているが、それが今後どう扱うことになるかという点まで記載した記事は少なく、また実際、それが決定されるのはしばらくかかると多い。よって、本章では、何らかの遺構が整備されることが決定した、又はその予定である、という記事をもとに表を作成した。なお、総件数は100件となった。

整備の対象は約31%が「城址」で、20%が「集落」、15%が「貝塚」、13%が「館跡」、残りをその他の遺構が構成しているという結果となった。全件数のほぼ9割が「史跡公園」あるいはそれに準ずる施設となっており、全国においてこれらの施設が完成、あるいは着工予定で、現在の史跡整備手法の主流がこれであることがわかる。その他に、公園としての機能のほか、体験学習用施設などを備えた施設が8件。これら史跡を公園として整備しようという動きは、遺構発掘が増加してきた90年代初め頃から盛んになってきたもので、遺構や遺跡に対する理解や関心を深めてもらおうという目的で始まった。近年ではむしろ地域住民の側が「町おこし」や「村おこし」目的で遺構や遺跡を施設化や公園化する例が増え、行政側もそれを支援する政策をいくつか打ち出したことで急激にこれら「史跡公園」計画が増加していったものと思われる。

しかしその多くは先に挙げた4種類が8割を占めている事からもわかるように、同じような目的で、同じような遺構をもとにしているため、似たような「史跡公園」やそれらに準ずる施設できてきているのが現状である。

そのためか、94年～95年頃からは「史跡公園」と何らかの別の機能を併せ持たせたものや、公園単体ではなく、その周辺地域をまとめて観光地化しようというように、工夫をした計画が増えてきている。

「史跡公園」以外の遺跡活用も全く無いわけではなく、出土した遺構を、材料として使える場合はそのまま活かそうとした鹿児島県の江戸時代の「稲荷川取水堰」遺構や、安土桃山時代と

表一-2 史跡整備の現況(1)

東釧路市	遺跡分類	整備概要	都道府県名	土木的内容	年代	整備内容
東釧路貝塚	貝塚	保存、公園整備	北海道	貝塚	縄文早期	貝塚は発掘前の現状に戻し、広場、駐車場、当時の住居、東屋、トイレなど公園整備、保存活用開始、という記事
入江貝塚	貝塚	史跡公園	北海道	貝塚	縄文前期～後期初頭	遺構は覆土、原型復元。建物復元、広場、資料館、公園設備、土器復元の体験学習施設、「縄文村」に復元して史跡整備
静川遺跡	集落	復元、史跡公園	北海道	環濠	縄文中期	遺構は覆土、原型復元。建物復元、広場、資料館、公園設備、土器復元の体験学習施設、「縄文村」に復元して史跡整備
北黄金貝塚	貝塚	復元、史跡公園など	北海道	貝塚、水場	縄文早期～後期	遺構は覆土、原型復元。建物復元、広場、資料館、公園設備、土器復元の体験学習施設、「縄文村」に復元して史跡整備
二ツ森貝塚	貝塚	史跡公園	青森	貝塚	縄文前～中期	芝生、遊歩道、案内板、駐車場、トイレ
三内丸山遺跡	集落	復元、保存整備	青森	盛り土など	縄文前～中期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
中里城跡	城址	史跡公園	青森	空堀、土塁	10C前半～11初め	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
榊城跡	城址	史跡公園	青森	空堀	14C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
樺山遺跡	配石	史跡公園	岩手	配石遺構	縄文前	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
御所野遺跡	配石	復元整備	岩手	環状列石、盛り土	10C前半～11初め	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
湯船沢遺跡	配石	復元、史跡公園	岩手	環状列石	縄文前	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
志波城跡	館跡	復元、史跡公園	岩手	堀、道路、井戸	縄文前	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
毛越寺庭園	庭園	復元整備	岩手	景石など	9C初め	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
柳之御所跡	館跡	複合整備	岩手	堀・池	12C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
沼津貝塚	貝塚	史跡公園	宮城	貝塚	縄文前	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
里兵貝塚	貝塚	保存整備	宮城	貝塚	縄文前	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
多賀城跡	城址	復元整備	宮城	道路など	8C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
白石城跡	城址	復元整備	宮城	石垣・石列	17C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
伊勢岱遺跡	配石	移設保存	秋田	環状列石	縄文後期初め	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
大湯環状列石	配石	復元、史跡公園	秋田	環状列石、土坑	縄文後期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
山根館跡	館跡	保存整備	秋田	土塁、石垣など	12C?	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
大串貝塚	貝塚	保存・展示	茨城	貝塚	縄文前期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
上高津貝塚	貝塚	史跡広場	茨城	貝塚	縄文後・晩期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
矢瀬遺跡	集落	史跡公園	群馬	配石	縄文	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
日高遺跡	集落	史跡公園、実験田	群馬	水田	弥生後期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
中高瀬観音遺跡	集落	史跡公園	群馬	柵列	弥生後期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
麻場城跡	城址	復元、史跡公園	群馬	堀	15C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
北新波岩跡	館跡	復元、史跡公園	群馬	土塁、堀	15C後半～16C半	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
水子貝塚	貝塚	史跡公園	埼玉	貝塚	縄文前期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
石田堤	堤	史跡公園	埼玉	堤	16C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
貝沼通船堀	運河	復元整備	埼玉	閘門、堀、堰	18C	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
加曾利貝塚	貝塚	保存・展示	千葉	貝塚	縄文早期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備
大森貝塚	貝塚	遺跡庭園	東京	貝塚	縄文後期～晩期	遺構を復元、区域を分け、集落復元と植生整備

表一-2 史跡整備の現況(2)

遺跡・遺構名	遺跡分類	整備概要	都道府県名	土木的内容	年代	整備内容
萩野山中藩陣屋跡	遺跡	史跡公園	神奈川	堀	18C	遺構は埋め戻して保存、1933年に設置された記念碑をそのままに広場、アスレチック用遊具、東屋、駐車場、トイレなど公園整備
八幡山遺跡群	集落	保存・史跡公園	新潟	環濠	弥生後期	当時の景観を再現する
松代城跡	城址	復元整備	長野	石垣・堀	16C	本丸の石垣、内堀、門など復元
天竜川・飯田市	堤	保存整備	長野	石造堤防	19C	地元史学会が掘り起こし、復元
苗木城跡	城址	復元整備	岐阜	石垣	不詳	石垣などを復元、安全に見学できるよう整備
安山田城跡	貝塚	復元整備	富山	土塁・堀、石垣	16C	石垣、堀、土塁などを復元、遊歩道を設置、資料館。
上山田貝塚	集落	学習施設建造	石川	貝塚	縄文	学習施設の建物を建設、展示
吉崎・次場遺跡	集落	史跡公園	石川	大溝	弥生	広場、当時の景観、建物整備、ベンチ、東屋、大溝復元
上荒屋遺跡	城址	復元整備	石川	運河・船着き場	弥生~15C	建物や運河、船着き場など荘園の原風景を復元、埋文センター設置
七尾城跡	城址	史跡公園	石川	石垣	19C	器や武家屋敷を復元、観光施設に
朝宮氏遺跡	館跡など	史跡公園	福井	石積み	16C	街並みを再現
登呂遺跡	集落	史跡公園	静岡	水田など	弥生後期	復元物を体験できる施設に改める。住居、農耕集落復元、体験学習センターを設ける、稲作研究センターも設置
志太郡街跡	館跡	史跡公園	静岡	井戸	8C	井戸のほか当時の建物、石敷き道路、板扉など復元、歴史の広場
朝日遺跡	集落	史跡整備	愛知	貝塚	弥生	貝塚の隣接地に体験学習、収蔵庫もかねた資料館新設
西尾城跡	城址	史跡公園	愛知	庭園など	19C	櫓や門とともに日本庭園、旧近衛邸を復元、公園整備
城之越遺跡	配石	復元整備	三重	配石、わき水場	7C~12C	実際に水を流す事ができる遺構保存手法で整備。案内施設着工
安土城跡	城址	史跡公園	滋賀	大手道	15C	大手道を復元整備
彦根城跡	城址	復元整備	滋賀	道路・橋、堀、庭園	15C	道路、橋、堀、庭園、屋敷を復元、資料館、広場の設置
森山遺跡	集落	復元整備	京都	周溝	縄文	当時の住居や周溝を復元、ベンチや花壇、公園化
神泉苑跡	館跡	保存	京都	船着き場、井戸など	8C	地下鉄工事時、特殊工法で船着き場遺構を保存、井戸は移設
亀山城跡	城址	復元整備	京都	石垣	16C	野面積みで石垣の復元。宗教学人「大本山」による
淀城跡	城址	復元整備	京都	石垣	17C	石垣の積み替え
池上曾根遺跡	集落	史跡公園	京都	環濠、水田、井戸	弥生	大井戸、当時の住居、水田、環濠などを復元、体験型史跡公園整備
海会寺遺跡	館跡	公園整備	大阪	石垣・盛土	8C	石垣や当時の寺院の柱、石垣の側面には当時の土盛り技術を見られるよう半地下構造トンネル
狭山池	池	保存・展示	大阪	人工池	8C~19C	堤の断面を50センチの厚さでスライスを、樹脂で固め、資料館を建設、設置
大阪城跡・難波宮跡	城址など	史跡公園	大阪	土坑	縄文~12C	大阪城跡(公園)と難波宮跡を一体化した歴史公園を整備
家原遺跡	集落	遺跡公園	兵庫	湯殿、園池など	16C	震災で壊れた湯殿や園池を再整備。
有馬城跡	館跡	復元整備	兵庫	石垣	16C	石垣を積み直し、井戸や建物跡を整備、史跡公園化
赤穂城本丸門	城址	修復	兵庫	石垣	17C	城址の本丸門の復元。土台に石垣。
葛城氏居館跡	館跡	復元整備	奈良	石垣・堀	5C	遺構は覆土保存、堀と護岸の石垣復元、芝と説明版設置
平城宮東院	庭園	復元整備	奈良	庭園(池など)	7C	石組みの岬、州浜、建物、大垣、古代の池、植栽を復元
飛鳥地区	地域	歴史街道・仮整備	奈良	道路	7C	公園の周辺から整備、遊歩道、案内板、休憩所など。
酒船石遺跡	石垣	修復・保存	奈良	池	6C後半~7C後半	石垣に風化防止のための処理をし、元の位置に戻し、覆いを掛けて雨を防ぐ
中之住遺跡	館跡	歴史公園	奈良	園池	7C後半	スボーツ施設を中止、遺構を埋め戻して建物や池を復元、歴史公園へ
春日野荘跡	園池	景観施設整備	奈良	園池	8C	園池を復元、サロン風建物建設
上之宮遺跡	園池	復元整備	奈良	園池	6C末~7C初め	園池遺構を移設して復元、植樹、案内板、公園化整備。
稗田環濠	集落	保存整備	奈良	環濠	15C半ば	堀を掘り下げた石積みで護岸整備
富田城跡	城址	復元・史跡公園	島根	空堀、石垣、土塁	16C中頃	堀を掘り下げた石積みで護岸整備
尼寺原遺跡	集落	史跡公園	島根	溝、道路	7C~12C	遺構は覆土し地下保存、広場やベンチ、説明版を設置。高校内の遺跡公園
米子城跡	城址	復元整備	鳥取	掘割(船たまり)、石造	17C後半	石垣遺構を博物館に移設、舟入り遺構とされる掘割を復元

表一-2 史跡整備の現況(3)

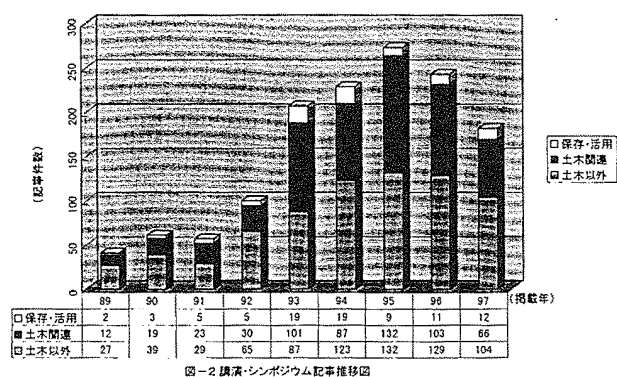
遺跡・遺構名	遺跡分類	整備概要	都道府県名	土木的内容	年代	整備内容
門田貝塚	貝塚	史跡公園	岡山	貝塚	弥生~鎌倉	遺跡は地下に保存、弥生時代の住居や用水溝を真上に再現、案内板を設置。周囲に弥生時代に生えていた木を植樹
津寺遺跡	堤	移築復元模型作成	岡山	堤防(盛り土、木材)	6C後半~7C半ば	元の遺構は89年に埋め戻し、築堰された遺構を素材に復元、施設に展示
岡山城跡	城址	復元、史跡公園	岡山	石垣・堀	16C	公園化されていない中段中心に復元整備。内堀、石垣の修復
方徳院跡	館跡	史跡公園	広島	竹製樋管	16C末	保護処理して露出展示、公園整備
阿方貝塚	貝塚	史跡公園	愛媛	貝塚	弥生前期	現状保存、芝を植えて広場にし、駐車場、トイレを設置
道後湯築城跡	城址	復元、複合公園整備	愛媛	道路、溝、堀、堀など	16C後半	堀、道、溝、堀、庭園整備、
松山城二之丸	城址	史跡公園	愛媛	大井戸(石造)	17C	石垣で構成される大井戸遺構を復元、露出展示
板付遺跡	集落	復元、史跡集落	福岡	水田・環濠・土塁・用水路	弥生	当時の道具で体験できるガイダンス施設
平塚川添遺跡	集落	環濠保存・史跡整備	福岡	環濠	弥生後期	環濠を復元、集落再現、当時の植物を植栽、体験学習施設や図書館を備えたガイダンス、研修センターを建設
御所ヶ谷遺跡	城址	復元、史跡公園	福岡	石塁、列石	7C後半	周辺遺跡と提携しゾーン形成、遺構復元、遊歩道、展望地など設置提言
吉野ヶ里遺跡	集落	史跡公園	佐賀	環濠、水田	弥生	体験学習施設やイベント広場の設置、自然植樹の整備
基肆城跡	城址	復元整備	佐賀	水門・土塁・石垣	7C	遊歩道設置、建物復元、資料館建設、眺望のため樹木を伐採
堤土塁跡	土塁	史跡公園	佐賀	堤	7~8C	灌漑が防護施設の版築技法堤。東西に別れているうちの東側を整備、一部を露出した標本展示所や案内板、駐車場、トイレ設置
鳥栖市山城群	城址	史跡公園	佐賀	石垣	15C	史跡公園化決定の記事
木下延後陣跡	館跡	保存整備	佐賀	石垣	17C	発掘されたまま露出展示。博物館と園路で結ぶ。定期的に埋め戻す
旧唐津城	城址	復元、史跡公園	佐賀	石垣	17C	やぐらの石垣を修復、広場に
原山支石墓群	配石	史跡公園	長崎	配石	縄文晩期	芝生を敷詰め植樹、駐車場とトイレ整備し公園化
日野江城跡	城址	野外博物館	長崎	構	13C前	城郭や神字校の復元、研究施設と宿泊施設を備えた学習センター設置
佐敷城跡	城址	復元整備	熊本	石垣	16C末	周囲と文化財ネットワーク形成
富岡城跡	城址	復元整備	熊本	石垣	17C	石垣などを補修・復元
旧佐土原城跡	城址	復元整備	宮崎	堀・土塁	12C~19C	当時のままに建物、石垣などを復元、遊歩道を整備
延岡城跡	城址	復元整備	宮崎	石垣、石畳	17C	資料館、遊歩道、庭園を整備
宇留貝塚	貝塚	復元整備	鹿児島	貝塚	縄文~弥生	石垣を復元整備を中心とした古代村とする構想
稲荷川取水堰	堰	復元整備	鹿児島	堰	19C	石を積み直して石垣が見える形で護岸
浦添城跡	城址	復元整備	沖縄	石垣など	14C~17C	発掘調査しながら建物や壕、庭園を復元、歴史公園に(96年から35年)
報得橋	橋	史跡公園など 移築保存	沖縄	石造橋	18C	架け替え工事のためわきに移築保存

いう古くからある環濠集落で、問題点だけを最小限の補強をすることによってそのまま歴史的景観に活かした「稗田環濠」という例もある。

これらに共通している問題としては、歴史的景観を活かした木や自然石などを使った昔からの工法を行ってみたいけれど、土木構造物の場合、材料の強度や安全性、防災の点や、法律上の問題などがあって、要望どおりに行くことは難しいようである。

4. 講演・シンポジウム関連記事の変遷 (図-2参照)

この項目では、記事から講演・シンポジウム・フォーラムなど、間接的に発掘に関わる記事を集計・整理し、グラフを作成した。記事の分類は、まず総計から土木に關係するものかどうかで分け、土木に關連する中でさらにその内容が保存・活用を中心としているものである記事を分けた。グラフの見方は、縦軸には記事件数、横軸に記事掲載年をとり、グラフの下には実際の数値を表示した。



総数の数値的な変化を見ると、89年から91年まではほぼ横ばいの状態であった件数が、92(平成4)年を境に急激に増加していることがわかる。それから93年には倍増、95年をピークに減少している。グラフの内訳をみると、90年から92年まで土木関連の講演・シンポジウムの数は増えてはいるもののそれほど変わらない。93年に総数が増えるとその割合とともに「土木関連」の件数は増加している。以後、「保存・活用」項目を足しあわせると全体の半数以上が土木関連であるという結果となった。

内容的には、古代の道に関するシンポジウムや、城址に関する講演などが目立った。「保存・活用」に関する講演・シンポジウム記事は「史跡を活かしたまちづくり」や「文化財を地域活性化の中心に」という内容が多く見られた。これらは総数のピークよりも前に多く見られ、その後、減少しているように見えるが、この要素が含まれている「土木関連」の件数もある。特に総合的に土木について扱っているものにはこの頃から「保存・活用」に関する研究の発表や報告が含まれるものが増えてきていることから、実際はほぼ同数以上であると思われる。

それではなぜこのような件数の変化となったのであろうか。調査報告会や研究発表が増えたのは、「2. 発掘遺構の内容と

年別の推移」の「(2) 発掘遺構件数の推移」項目にも関係するが、建設工事が増加してきていることで発掘総数が増えていることが大きく関係していると考えられる。発掘記事の内容によると、発掘・調査のきっかけは、圃場整備や道路工事など何らかの工事に伴って見つかった、と記述されているのが多く見られたこともこれを裏付けている。

次に、保存・活用に関する講演などが増えている理由としては、牽引力となる遺構の発掘がある。代表的な例は89年の吉野ヶ里遺跡や94年の三内丸山遺跡などで、これらの大規模遺構の発見・経済的影響がきっかけとなり、その後、文化庁や自治省、建設省など行政側でも「まちづくり特別対策事業」や「文化財を活かしたモデル地域づくり」、「古代ロマン再生事業」といった経済的支援を開始、地方公共団体がそれらに着目し、関心が寄せられるようになった結果、このような動きになったのではないかと考えられる。

5. おわりに

本研究では、新聞史料を統計的に扱い、記事件数から何が読み取れるかということと、それではわかりにくいと思われる点を記事内容で補足するかたちを取った。その結果、近年の実際に出土している遺構数の概況と、活用内容、遺構を活かしているという世論の関心がどのように変化してきているかということが大まかではあるが把握できたように思う。

建設工事などによる発掘調査が進み、それにより様々な遺構が出土、その情報が公開されることで世論の関心を生み、それに対応した「史跡を地域の財産としてとらえ、整備しよう」という行政政策が採用され、現在に至るという流れはある。しかしながら、発掘されている遺構と、活用されている、あるいはされ得る遺構との内容や種類、数量的な開きは大きい。例えば道路遺構を見てみると、今回の検討範囲では合計152件もの数が見つかったのに、活用しようとする動きは城址や館跡に付随する遺構以外ほとんど見られなかった。このように、依然として大部分の遺構は記録保存のみで失われている分類項目があるというのが現況のようである。貴重な発掘遺構を保存・活用していくには、史跡公園型の方法以外にも、例えば古くから用いられてきた土や木、自然石などの材料や、工法を用いた構造物の復元などを行い、実際にその遺構を本来の機能(例えば道路や堤)で運用したり、またそのための基礎的研究、材料強度の安定化や保存工法についてなどを進めていくことがこれからも必要であると思われる。

新聞史料はこのように複数のデータを短期間でまとめ、現代における遺構の扱いというような流れをつかむことに適しており、そのためのデータベースとして用いることが可能である。ただし、今回の検討方法では、土木の各時代の工法や技術の特徴、分布など細かいところまで考察することはできなかった。今後はそれらについての側面を検討していきたいと思う。

参考文献

- 1) ジャパン通信情報センター：『月刊 文化財発掘出土情報』、1989～1998